



## ライフステージに応じた関わりって①？

### A. まずは乳児期と幼児期についてです。



子どもが大きくなっていくにしたがって、少しずつ必要な支援や関わりかたが変わっていくのね。ここでは主に子どもに関する、ということで、乳児期と幼児期、[学童期と青年期](#)、の2つに分け、それぞれの時期に重要なキーパーソンとしての親(保護者)と、支援者の関わりかたについて考えてみます。

成人のサービスである壮年期、高齢期については今回は触れません。

乳児期の関わりの特徴として、ほとんどのことを子どもの了解なしに親が決めている、ということがあげられます。

子どもの自我、というものがまだ確立していないころで、子どもと親が一体化、分離していない時期ですね。

親や周囲の人が、子どもにとって安心できる適切な環境を用意する必要があります。

家が安心して快適な環境になるように努める、ということが親や支援者にとって必要なこと。

親や身近な人とのきずなが強まっていく時期でもあるので、目をしっかりと見て関わるなどの配慮も必要ですね。

でも、まだ[特性や障がい](#)は解りにくい状態でもあります。

幼児期になると、[自分で決める](#)ことができ、大人の指示を聞かなかったりすることが増えてきます。

自分がやりたいこと興味のあるものが優先されて、周りのことは目に入らなくなることも多い。

そして、特性や障がい表面化することが多い時期でもあります。

親や周囲の大人が適切な環境を用意した中で育ち、生活していく中で自我、が芽生えてくるのですね。

自我は子どもの発達においてとても必要なことなので、適切に関わっていかなければなりません。

むずかしいのは、期待しすぎると思いと違ったときに落胆してしまうし、達観しすぎると子どもの発達に影響が出てくる、このバランスかもしれません。

この時期の子どもの特徴として、見て覚えるのは得意だけれど、聞いて理解するのは苦手  
で、生活の中のさまざまなことを通して心身機能を使っていくことを覚えます。

五感(見る・聞く・嗅ぐ・味わう・触る)を通して、外界の情報を取り入れることを知って、好  
き・嫌い・心地よい・気持ち悪いなどの情報を表出します。

[生活の中で体験を積んで](#)、生活に必要なスキルを獲得していくのですね。

親子の分離が始まるのもこのころからで、子どもの自我の成長に合わせて、少しずつ距離  
が出てくる時期です。

ここでも期待と達観のバランスがむずかしいところ。

子どもへの関わりは、試行錯誤の繰り返し、なのですね。

親や支援する人が気をつけたいことは

「発達段階と実際の年齢の落としどころ」「能力の補完」

をどうしていくか、です。

「発達段階と実際の年齢の落としどころ」というのは、本人にとってちょうどよいところを探す  
こと、ですね。

「能力の補完」は、本人の能力をどうしたら人や物で補っていけるか、という[環境整備](#)のこ  
と。

これらを常に、見立てて試してみて、[モニタリング](#)して再度見立てる、を[繰り返して](#)いくこ  
とになります。

他者と関わることなくひとりで遊ぶことに没頭している、として、他者と一緒に遊ぶことがで  
きるのか、それともこのまま関わらないままいくのか。

少人数なら遊べるのか、それとも、場所や遊び方の内容を工夫すればできるのか。

これらを常に考えていくことになります。

ここまでの主に[児童発達支援](#)が関わっていく”仕事”で、発達段階に応じた、そのときに  
必要な生活体験を、どのように経験し積んでいくのか、を考えながら関わっています。

将来の「[自立](#)」に向かう基礎として、人との関わりを生活体験の中から身に付けていく、そう  
いう時期なのですね。

これらのことを踏まえたうえで、[放課後等デイサービス](#)は、さらに何を積み上げていけるの  
か、を考えていかななくてはならないのですね。

## 《MENU》

[《ライフステージと支援の関係は？》](#)

[ライフステージに応じた関りって②？》](#)